

# 1 Penelope → Pocahontas → St.Simon

配合史をどこから書き始めるか、というのは非常な難問である。常に Eclipse や Herod について語る機会に遭遇すると、結局はダーレーアラビアンのような後発の種牡馬ではなく、もっと古いグーシーズイエロータークあたりから始めなければならなくなる。しかし1680年まで遡及してみても切りがないだろう。

配合史を書くことは、配合やそもそもの競馬に対する認識を語ることに他ならない。日本の配合史を書くなら、明治40年の小岩井の基礎種牝馬の導入から始めることになろうが、それらの種の5代まで祖先を遡って認識を展開するなら1849年生まれの Stockwell について触れる必要に迫られてくる。明治元年が1868年だから、日本の配合史は Stockwell の時代からということになろう。

## ピネラピ

ストックウェル Stockwell が何故に7回もリーディングサイアーとなったか、この馬はギニーとレジャーに勝った名馬だが、あの当時産駒が1000勝以上を挙げるといふ偉業は何と表現したらいいかわからない。とりえず爆発的成功——とでも言っておこうか、こうして Stockwell の血がほとんどすべての後世のサラブレッドを席捲していった。

この馬自身が持っている大胆な配合を解いていくと、話を1798年のピネラピ Penelope からスタートさせる羽目に陥る。

Penelope とは20年もオデッセイの帰りを待たされたといわれる貞淑の鏡のような女だが、その名を冠  
◇Penelope (1798, F1)

Snap 4×3, 母Blank 3×3

